

落語家の名前を探ってみると・・・

落語家の名前を羅列してみると、古今亭、三遊亭、桂、林家などの亭号が出てくる。

亭号と名前を何気なく見ているとあまり気にもせずに通り過ぎてしまうのだが、「あれ?」と思って深く考えてみると思わず吹き出すような名前だったり、染みいるような美しい名前だったりするから面白い。

主立った亭号の誕生の経緯などを知りたいと思って調べてみた。

<1> 三遊亭

「三遊亭」という亭号の落語家は数が多い。

よくよく考えて見ると、「三つの遊び」ということは「飲む・打つ・買う」の三道楽を意味している。

初代三遊亭圓生が「三遊亭」の始まりらしい。1768年(明和5年)江戸は神田の生まれ。様々な噺家の門下に入り様々な名前を持ったが、山遊亭猿松・立川馬笑などを経て三遊亭圓生となった。

三遊亭圓生とは、「飲む・打つ・買うで圓く生きる」ということで、意味を考えて見るととんでもない名前である。

圓生の弟子の名を見ると、圓窓・圓歌・圓弥・圓丈など「圓」をいただいた名が並ぶだけで面白味はない。

私が知っている三遊亭圓生は六代目で、1979年に79才で他界。その後この名跡は「止め名」とされている。三遊亭圓朝の作品を掘り起こすなど、落語の歴史とその継承に努め、数多くの著書も残している。個人的には「鰻沢」と「猫定」が気に入っていて何度聴いても深い味わいを感じる。

一時「七代目を作ろう」という動きが出て、何人かの名前が挙がったことがあったが「もめ事の種」となり引込められたと聴いた事がある。歴史を調べてみたら、五代目逝去後にも同様のもめ事があつたらしく、由緒ある三遊亭圓生の名前はどうか鬼門らしい。

<2> 古今亭

初代三遊亭圓生の弟子だった初代三遊亭圓太が独立して初代古今亭志ん生を名乗ったのが「古今亭」の始まりと言われている。そしてこの古今亭志ん生という名も五代目で止まっている。

五代目古今亭志ん生は、芸事好きが高じて三遊亭圓盛の門下で指導を受けて、三遊亭盛朝の名をもらってセミプロの活動をしていた。20才で三遊亭小圓朝の門下に入り、三遊亭朝太の名でプロの道を歩き始めた。

以来師匠替えと改名が多いことでは有名。三遊亭圓菊の名で二つ目になり、真打ち昇進は金原亭馬さん。

18回の改名の末に五代目古今亭志ん生を名乗ったのは昭和14年(1939年)、49才の時だった。

息子である古今亭志ん朝が志ん生を継ぐのではないかと噂された時代もあったが、志ん朝の思わぬ早逝もあり立ち消えになった。そして、古今亭志ん生という名も「止め名」と言われている。

「三遊亭」が男の三道楽から来ているのに比べ、「古今亭」という名は「末永く続く」ことを願う「真面目な名」なのが面白い。

<3> 柳家

初代船遊亭扇橋の門下にいた舞遊亭扇蝶がのちに麗々亭柳橋を名乗った。江戸時代に人情噺の名人と言われたが、この人が柳派の開祖者と言われている。

麗々亭柳橋の門下には柳亭左楽、春風亭梅枝、二代目柳橋、三代目柳橋や春風亭柳枝がいて、柳派の流れの始まりを作ったと言われている。江戸時代後半から柳亭燕枝が中心となり柳派を育てた。

初代春風亭梅枝の門下に二代目柳家小さんの名が残っており、このあたりから柳家の亭号が続くようになったようだ。人間国宝になった柳家小さんは五代目にあたり、その弟子で昨年亡くなった十代目柳家小三治も人間国宝になった。

それにしても柳家のルーツをたどると、「扇橋で船遊び」に始まり「扇や蝶と舞い遊ぶ」、そして「麗しき柳橋」と

なり、「春風に揺れる柳の枝」と粋な遊び場所を感じさせる名ばかりで美しいが、柳家になってしまうと、さほど粋な名も美しい名も残っていないように感じる。

<4> 春風亭

前述の麗々亭柳橋の弟子だった人が初代春風亭柳枝を名乗ったのが「春風亭」の始まりといわれている。柳枝・梅枝・燕枝・鶴枝などの名が並び、そこから枝分かれするように師匠の名の一字をいただいて、柳橋・燕路など扇のように広がって行った。

麗々亭柳橋が俳人としても優れていたことからだろうか、季節を感じさせる美しい響きの名が並んだが、年経ても風情のある名前が多いのに気がつく。しかし現代まで来る間にはその「名の風情」は失せてしまい「師匠の名の一字」だけでつながっているのは少々残念な気がする。

春風亭柳橋は、「春風に乗って柳橋で遊ぼう」であり、春風亭柳朝は「朝帰りの道の岸辺の柳」を想起し 春風亭柳昇に至っては「小野道風の蛙の逸話」までも思い起こさせるから、粋であり愉快でもある。

<5> 三笑亭

子どもの頃にラジオで聴いた三笑亭可楽は、だみ声でしゃべり方も怖いので印象に残ったが、それでいて要所のおかしさは押さえている感じがした。「山椒は小粒でピリリと辛い」という言葉が基になっている名前であることはすぐにわかったが、語り口がまさにピリリと辛い感じがした。

「三笑亭」を初めて名乗った初代三笑亭可楽は、安永6年(1777年)に生まれ天保4年に他界した。

職人をしてながら天狗連で活躍した後で職業芸人に転じたと言われている。

三笑亭可楽の名は受け継がれて、今は九代目になり、代々「楽」の字を受け継いでいるようで、多くの噺家を輩出している。子どもの頃に聴いただみ声の可楽は八代目だった。

「三笑亭」という名の起こりについて調べてみたがどこにも記述は見つからなかった。「虎溪三笑」という陶淵明にまつわる逸話が見つかったが、何か関係はないのだろうか。

<6> 林家

初代三笑亭可楽の弟子だった三笑亭楽我が、晩年になって林屋正蔵を名乗ったのが「林家」の始まりで、その後五代目で「林家」となった。

七代目林家正蔵(本名:海老名竹三郎)は、1919年に柳家三語楼の門下に入り、柳家三平を名乗った。その後七代目柳家小三治を名乗った時期もあったが、襲名問題でのいざこざにはまり返上、結果として六代目の遺族から譲り受けて七代目林家正蔵となった。

「どうもすみません」や「げんこつを握って額にあてる仕草」は七代目が始めたもので、これを後の世で息子の林家三平が売り物にしていた。落語家としての林家三平は七代目橘家圓藏の門下に入った。

八代目正蔵(本名:岡本義)は1895年東京の生まれで、二代目三遊亭三福に入門。のちに師匠と共に四代目橘家圓藏の内弟子になり、橘家二三蔵の名で二つ目昇進。その後三代目三遊亭圓楽となり、真打昇進。

師匠圓藏の死去後三代目柳家小さんの預かり弟子となり、師匠の死後に五代目蝶花楼馬楽を襲名。

1950年に海老名家から許しを得て、一代限りの条件で八代目林家正蔵を襲名。1980年林家三平逝去後、名跡を海老名家に返上して林家彦六に改名。ここに書いてない改名もいくつかあり、名前だけを取ってみれば忙しい落語人生だったようである。

上方の林家は、江戸の「林屋」から分派して「林家」を名乗ったのが始まりと言われている。

<6> 桂

「桂」の亭号は江戸にも上方にもあるが、始まりは上方の初代桂文治と言われている。1773年(安永2年)生まれだが、生誕の地ははっきりしないらしい。露の五郎兵衛や米沢彦八が屋外に小屋がけして噺を聞かせていた時代に、常打ちの寄席を開いて噺をしていたという。

佳木山太融寺の檀家であったことから、寺の山号から連想して「桂」と名乗ったという説と、先祖が桂中納言左近という人だったことから「桂」と名乗ったという説とがあるが、詳しいことは分かっていないらしい。また、三代目桂文治が江戸に出て桂文楽を名乗っていたのが、江戸の桂の始まりと言われている。

<7> 笑福亭

松富久亭松竹(しょうふくてい しょちく)が笑福亭の開祖と言われている。次の代から「笑福亭」となり、代々受け継がれている。生年も没年も明かでないが、初代桂文治からの分家なので、1700年代後半から1800年代前半あたりに活躍した噺家だと思われる。「千両みかん」「初天神」「猫の忠信」「立ち切れ線香」などの作者としても名を残している。

六代目笑福亭松鶴の弟子に笑福亭松竹(しょうふくてい まつたけ)という落語家がいるが、開祖とは何の関係もないという。(まぎらわしい名前をつけただけ)

<8> 立川

昭和の時代に七代目立川談志が「立川流」という流派を起こしてひとつの時代を作ったので、新しい名前のように思う人も少なくない。しかし、江戸時代に立川ぜん馬、立川談笑などの名前があり、決して新しい名前ではない。初代三遊亭圓生も一時「立川焉笑(たてかわえんしょう)」を名乗っていたことがある。

江戸時代後期の浄瑠璃作家の烏亭焉馬(うていえんば)が、居住していた本所相生町の豎川堀から引用して立川を名乗ることがあった。つながりのある歌舞伎役者や芸人に「立川」を名乗る人が出てきたのもこの時期らしい。

烏亭焉馬は江戸落語中興の祖とも言われている人で、弟子には初代立川談笑という名も残っている。

三遊亭、古今亭、柳家、春風亭、林家、桂、笑福亭、立川と八つの亭号について遡ってみたが、この他にも亭号は沢山有る。柳亭、金原亭、橘家、橘ノ、蝶花楼、五街道、五明楼……歴史年表に登場する名だけでも数え切れなほどにある。新しいものや稀少なもので並べたら紙面がいくらあっても足りないので、今回の勉強はこの八つに留めることにした。

以上

◆参照情報

落語に関する諸書籍を参照・引用したが、インターネット上で参照した「東西落語家系図」が役に立った(下記 URL)

<https://www.cd-v.net/rakugo/keizu/kezu.html>